

発達障害児を持つ父親の成長過程についての研究

— 青年期の子どもの父親の語りから —

○ 札幌市児童福祉総合センター 今西 良輔 (7447)

キーワード：発達障害 父親 成長変化

1. 研究目的

近年、父親の子育てが多く取り上げられており、どのように父親が家庭に参加していくのが焦点とされている。母親の育児の負担が大きいと言われている発達障害のある子どもを持つ家庭では、父親も協力して子育てすることで育児負担は軽減すると思われる。

近代的になってきている世において、父親がどのような役割を果たすべきなのか、あるいは果たしているのかを改めて考える必要があるのかもしれない。そのために、まず父親自身がどのように歩み、変化しているのかを検討する必要がある。本研究では、子どもが生まれ父親となり、障害に気づき、障害児を持つ父親となることをどのように感じてきたのかという視点から、父親としての成長変化を描くことを目的としている。

2. 研究の視点および方法

近年、発達障害に対する社会的認知が拡大しつつある。障害児の養育や教育に対してその子の特性に合わせた関わりが重要視されてきている。家庭において、子どもに適切な療育や育児を行うためには、母親だけではなく、父親の協力も必要不可欠である。

障害児を養育する親は、健常児を養育する親に比べて負担感が大きい所が挙げられる。子どもが生まれた後も就労している母親はおり、夫婦共働きで家庭を築いていることはすでに珍しいことではない。つまり、従来に比べ父親の育児の役割や使命というのは大きくなってきていると思われる。仕事をしながら、育児をしながら、と言ったような状況で障害児を育てている親を理解するためには、障害受容のみに焦点を当てるだけではなく、親を取り巻く社会、家庭、という周辺生活全てにおける変化を捉えていくことが理解に繋がる視点と思われる。障害児を養育する母親の変容に関する研究は取り上げられているが、父親に関する変容を取り上げている研究の乏しさも見られている。沢山の親がそれぞれの生き方をしており、生物学的に母性と父性があるように、母親は母親なりに変化し、父親は父親なりに変化しているだろう。各々が家庭の中で試行錯誤を通して、関わり合いながら生活を送っている。現代社会で障害児を養育していくため、夫婦が協同していくためにも、改めて父親としての成長変化に迫る必要はあると考える。

本研究は、2010年8月から9月にかけて、北海道の発達障害の親の会に所属している、18歳から29歳の子どもを持つ父親3名に半構造化面接を実施した。面接は、1人3時間程度の間で実施。3名中1名は、複数回の面接を実施した。全員の承諾を得て、ICレコーダーに録音し逐語録を作成した。面接内容は、子どもが生まれて、障害がわかり、そこから成長していくという過程、そしてこれからの先の将来について自由に語ってもらうこととした。

3. 倫理的配慮

研究対象者となる父親に対して研究の趣旨を書面と口頭にて説明し、データは匿名と守秘を保障し、参加を途中で拒否する権利の保障、断った場合に個人へ不利益が生じないことについて同意を得ている。本研究は、北海道大学倫理委員会の承認を得て実施した。

4. 研究結果

研究協力者は、40代1名、50代2名の父親で、子どもは青年期に達している10代1名、20代2名である。障害は、アスペルガー症候群、LD,ADHD、自閉症など発達障害の診断を受けている。分析方法は、エピソードに沿って、父親が父親として育児や障害に気づき、感じていたことの語りを研究目的に照らし合わせながら質的に分析を行った。コード化し、カテゴリーとしてまとめることで、コアカテゴリーとして11項目が抽出された。

①『関わり方への戸惑い』、②『母親任せ』、③『経済的な支え』という想いがあり、障害がわかる、子育ての問題に直面するなどの気づきから、子どもや家庭に向き合うようになり、④『反省と模索』、⑤『家庭と仕事での悩み』、⑥『後悔しつつ将来を考える』⑦『障害理解』、⑧『子どもに関わろうとする』、⑨『家庭内に居場所を感じる』⑩『社会に対して啓発活動』、⑪『子どもと向き合い、自立を目指す』という成長変化を見せていた。父親が子どもや家庭との関わりに戸惑い、障害を知り、家庭での役割を感じていく過程において、社会的な立ち位置、仕事との葛藤などを乗り越えながら、新たな振る舞いによっていくというダイナミクスな姿を捉えたものである。各カテゴリーは、父親の中で順を追って起きるといって一方方向的な成長というのではなく、父親となっていく中でそれらが付加されて起きている成長変化である。これは、個々の生活の中で段階や過程を進みながら父親となっていくのではなく、父親の中で起きている変化であるため、抽出された状態を行き来したり、留まり、避けたりといったことが個々の父親に概ね起きている。

5. 考察

正高(2002)は、父親の役割というと子どもを外の世界に導き子どもを後方支援するという社会化への手助けをすると述べており、今回の結果から父親は、社会に対して子どもを支援するという意味で類似していることが指摘できるが、その考えに行き着くまでには父親なりの悲観的な感情や楽観的な感情などいろいろな想いを巡らせていることが推察された。一般的に障害児を持つ母親は、Drotar(1975)の段階説のような5つの障害受容過程を重ねながら変化すること、Olshansky(1962)の慢性的悲哀説のように絶え間なく悲しみ続けている状態を示すようだが、父親は、ショックや否認を飛び越えて現実的・楽観的に捉え悲しみ続けることよりも、どのように適応していくかに注目が移っていると考えられた。父親なりに右往左往しながら悩んでおり、きっかけを積み上げて結びつくような体験が必要とされている。育児や家庭に対して意識的に活動する父親は、自分なりに見出しているが、全ての父親が同一とは限らない。子どもの特性同様に、父親の成長変化は、個々の父親に合わせた体験ときっかけを上手く結び付けていくことが重要な課題と考えられた。